
魔法少年リリカル？なのは

こーこうせい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少年リリカル？なのは

【Nコード】

N5852Z

【作者名】

こーこうせい

【あらすじ】

え？何？コレ読むの？

「魔法少女リリカルなのはが男の子！？性別性格正反対の彼が巻き起こす魔法世界！！一体どうなってしまうのか！！？」

魔法少年リリカル？なのは、始まる」

はじめたくないよ。

ブログ（前書き）

え、コレ？半分ネタだから書きたいときに書くよ!!!
だから超不定期更新（笑）

まあ、性転換物なので苦手な人は即Turn Around!!!
o Back!!
あ、12/20めちやくちや変更

プロローグ

薄暗い森の中で一人の少女が何者かと戦っていた。少女は腕から血を流し、満身創痍。

一方対する相手は見たことのないような黒く禍々しい物体。黒い物体は少女に体当たりなどを繰り返し、少女を苦しめていく。

少女は懐から赤い宝石のような珠を取り出し、何かを叫ぶ。すると目の前に光で構成される円形の模様が現れた。

黒い物体はそれにぶつかり、その体から強い光を発する。物体はその光を恐れてか、大きく跳躍し、それから逃げる。

少女はそれを見た後膝を着いてしまう。追いかけてようと立ち上がろうとするが、疲労のせいかうまく立てない。そしてついには地面に倒れ伏せてしまう。

少女の体はそのまま光り始め、小動物の姿に変わった。そして小さな声で、消え入るような声で叫ぶ。

「逃がし、ちゃった……追いかけてなくちゃ……。誰か……。ボクの声聞いて……。力を貸して。魔法の……。力を……」

その声は誰かに届いたのか、それとも届いていないのか……

- - - - -

P i P i P i P i ! ! !

けたたましい電子音と共に一人の少年が起きる。もぞりと布団が動き中から手が出て、音が出ていた対象、携帯電話のボタンを押す。

「もう、時間？」

そんな音と共に布団から出てきた顔はどうみても少女。

出てきたのは高町なのは、小学三年生。

男

どっからどう見ても少女だが男であるのだからしょうがない。ちやんとついでるよ？アレ。

現在時刻、6:00

さて、俺がこの時間に起きたのは他でもない。男らしい体になるため、トレーニングだ。俺の体は少し、いやかなり女。ついでに名前も女っぽい。男が女に見られるのは結構悲しいんだよ。

実は兄と姉は……まあ後で紹介するが、すでに起きて朝の練習をしていると思う。俺は小学三年生だから参加させてもらえなかった。まあ、休みの日はやらせてもらってるから多少は心得てる。

さて、今日やることは……朝のランニングかな。ひとまず3kmぐらいいつてこよう。

「ふう……」

とりま3km走って帰ってきた。ペースが上がっているのは嬉しい

よ。かなり嬉しい。だけどね、

「なんで道行く人すべてがなのはちゃんって言うかな。もう3ヶ月は走ってるのに」

多分いじめだと思う。

さて、家に戻り、シャワーを浴びて帰ってみると母さんがご飯の準備をしていた。

「あら、おかえりなのは。どうだった？」

「まあまあかな」

高町桃子

33歳の癖に謎の若さ。近所の人には魔女とか言われている。多分正解。俺の産みの親で女の子な顔にした張本人。髪の色から顔の形までほぼそっくり。男なのに。

「これもってってくれる？」

「あいよ」

母さんから渡され、もって行くいくつものコップ。俺には……お
お、牛乳。I Love GYUNYU・英語だとmilkだがそ
こは気にするな。

リビングにもって行くとそこには言わずもがな、100人中80人がイケメンだろうと言える人が。

「今日も走ってきたのか？偉いなあ……今度父さんも行くのかな」

「もう負けないよ？」

高町士郎

37歳という年の癖にイケメソ。近所の奥様方に人気。兄はこいつ譲り。ずるずる。

昔めっちゃ大怪我して入院してた。んで危ない仕事やめて今は翠屋つつう喫茶で働いてる。

翠屋は……まあ、黒歴史だらけだからまた今度。

さて、後いないのは兄と姉だけか……

「ちよつと二人呼んで来るわ」

「うん。お願い」

我が家自慢の道場にいったらみると兄と姉がいた。

兄は姉に小太刀二刀御神流を教えている。一見厨二だろ……とか思うけどコレマジ強い。

高町恭也

19歳。彼女もいるずるいやつ。イケメン。リア充。でもけんかは強い。

姉の美由紀。

高校2年。それ以外特になし。あ、あえて言うならかなりの料理音痴。砂糖と塩を間違えるならいい方。野菜を洗えといえば洗剤で洗ってくれる凄い奴。

「おーい、飯だつてさ」

後ろからタオルを投げる。

振り向かずに取った。半端ない奴。後ろに目でもあるのか。

さて、食卓につき、ご飯を食べる。俺は終始無言。

べつにしゃべれないわけじゃない。しゃべりたくないんだ。

「今朝のご飯もおいしいなあ！とくにこのスクランブルエッグが！」

「ほんとあ？トッピングのトマトとチーズと、それからバジルが隠し味なの！」

「みんなあれだぞ？こんな料理上手なお母さんもって皆幸せだぞ？分かってんのか！？」

母親と父親然り。

いまだ新婚気分か。

「あ、美由紀、リボンが曲がってる」

「え、本当？」

兄と姉然り。

お前らはバカップルか。ってか兄、お前彼女いるだろう。

まあ、こんな具合でしゃべろうにもしゃべれない。甘ったるい空間が続くんだ。

飯から砂糖が出ないうちに俺はさっさと飯を食い、

「いってきます」

早々と家を出た。

あそこにいたら胸やけがヤバイ。

まあ、そんな家族です。

でも思う。

トッピングのトマトとチーズと、それからバジルが隠し味もはや隠してないと思う。

プロローグ（後書き）

え、ただの紹介。

あ、気づいての通りなのはとユーノしか変えませんがーw

出会い(笑)(前書き)

遊びすぎましたすみません。

ってかやっぱギャグとか無理w笑いを取れる気がしない。まあ、普通にシリアス系になると思いますよ。

でわ、どぞ

出会い（笑）

家を出て俺が向かった先は私立聖祥大学付属小学校。わりと名門、わりと頭がいい。んで、わりとお金持ちが通ってるんで小学校なのにバス通学。

いつもの時間にいつものバスに乗る。するといつもの面子がそこにいた。

「なのはちゃん！」

「なのは！こっちこっち！」

昨日はへんな夢を見て眠れなかったし、正直寝たりなかった俺は普通に一人用の座席に座ろうと試みるが、二人の「あなたの座るスペースは私達の間が決まっている」光線にあえなく沈黙。

俺だって男だ。女子の間にはさまれて座るのはかなりの抵抗がある。そして気づいてないかもだがこいつらは一応美少女。周りの男子…：まあ俺のことを知ってる奴の視線がヤバイ。他の奴らは多分女子三人にしか見てないと思うけど。そして月村。ちゃんはやめると何度言えば分かる。

「よお、月村、バーニング」

「誰がバーニングよ！！」

小1からの付き合いの月村すずかとアリサ・バニングス。どう考え
てもバーニング。声的にもバーニング。

「いいかげんちゃんと名前呼びなさいよ！」

「ああ、悪いな、アル」

「ほんとだよ兄さ……何言わせんのよ!!」

ノリつつこみもお手の物なお嬢様です。

月村は終始微笑んだ。テラ怖す。

小1のあることがきっかけで（不本意ながら）仲良くなってしまっ
た。

最近は同じ塾にも行っていたりする。

まあ、そのことは後述。

さて、学校に着いて適当な授業を寝てすごして、4時間目終了の合
図。

「飯だー!!!」

「高町さんづるさい！まだ終わってません」

授業が延びていたようです。やられた。

さてさて、はずかしー思い（爆）をしてすぐあと、俺は屋上に来ていた。

屋上は昼飯を食べるには絶好の場所。んでかなり人気な場所でもある。いつも一人で行こうとするのだが

「なのは！まちなさい！」

「なのはちゃんまって！」

なぜかいつもこいつらが付いて来る

「おまえら女子と食えよ」

「いいじゃない。あんた食べる人いないんでしょ？」

「しづく…」

確かに。

俺はこの容姿だからか、同性の友達は……多分いない。まあ、しゃべるくらいはあるが友達ではないかもしれない。つてか十人中十人が女というこの容姿。先生からも女子に見られていた俺は女子の友達しかいない。なんと言う悲しさ。

「ほら、行くわよ」

一人で行こうと思ったのに気づいたら3人いて、気づいたら屋上で飯食ってた。

「私はお父さんとお母さんの会社を継ぎたいかな。そのため経営学とかやるうと思ってる」

「私は機械系が好きだから、これから工学系に進みたいな」

「おまえら本当に9歳か？」

そしえ俺以外のこの二人。頭が大変よろしく、すでに将来のことを考えている。9歳なのに大学のことまで考えている凄い奴ら。俺は……まあ、そのうちなんとかなるさ。一応成績トップクラスやし。

「なあ、お前ら普通に就職とか考えてるけどさ、専業主婦とかはダメなの？」

「え？」

えって。普通はそっちが先に出るような気がする。

「だってよお、お前ら女だろ？そんなわざわざ仕事するとか……ばか？」

「バカじゃないわよ！！」

まあ、お前俺よりはバカだけどな。成績的に。

「ふ、普通に結婚とかも憧れてるわよ！？」

顔を真っ赤にして言うバーニング。
そして辺りすっごい沈黙。

「」「」

「ちよっと！なんで黙るのよ！？」

俺と月村は顔を見合わせる。

そして俺はバーニングの肩に手を置いた。そして目を見つめる。

「ひゃっ!」

「あんなバーニング」

「な、何よ……」

「結婚ってな？相手が必要なんだ」

刹那俺の目の前は真っ黒になった。

だってこんな暴力系女子だれが受け止められるよ……こいつの告白シ

ーンとか考えてみ？絶対考えられねえよ。

「だ、大体あんたこそどうなのよ！あんたこそ結婚とか無理なんじやないの！？」

「なにをおっしゃるか。俺にはこいつがいる。なあ、月村」

「うん！」

口をあんぐりあけて驚いているバーニング。
まあ、冗談はここま……どうした月村？

「なのはちゃん。式はどうする？和風？洋風？」

えっ。何この子。何言ってるの？

「そうよね。なのはにはさすが……お幸せに……」

「お前も何一言ってるの！？」

この事態を收拾するのに10分必要になった。月村はガチで悔しかった。どういうこっちゃんい。

んで飯食う時間残り2分ちよい。終わったな。

ところでバーニング。その手の袋に入っているのは？

「メロンパンに決まってるじゃない！」

狙った？

そして帰り道。

今日は残念ながら塾なので歩いて帰路に向かう。すると途中、バーニングがこっち行こう！とかいいだしてわき道にそれた。塾に行く近道らしい。

そこで俺はふと気づく。

ここ、夢で見た場所じゃね？

なんかへんな場所だった気はしたけど…

「どうしたの？なのは」

「いや、なんでもねえ」

そのまま二人についていく。
すると頭の中に声が響いた

《助けて！！》

！！？

突然聞こえる音にこわばる。

「おい、お前らなんか言ったか？」

「へ？なにいつてるのなのはちゃん。何もいつてな《助けて！！》」

月村がそういつているときにも聞こえる謎の声。
どーゆーことだ。

「幻聴？」

「はい？……すずか。離れなさい。きつとこいつ精神病患者だわ」

「んなわけあるか！！」

しかしそんなことを言われても聞こえてしまったのだから仕方ない。

とりあえず、頭の中で返事をする。

《俺に言ってる？》

まあ、こんなんの意味があるとは思えない。

気のせいか、と思い二人についていくことに。しかし少しあるいた後、再び聞こえてくる。

《良かった……聞いてくれた人が》

《うわ、マジで聞こえた！》

先に行く月村とバーニングを横目に、立ち止まり、耳をふさいで精神集中。

《説明は後ですますから……助けてください！》

考えるより早く、俺は先に行く二人を追い越し走り出していた。

「ちょー！なのは！？どうしたの！？あんた本当に！？」

「なのはちゃん！」

バーニングの言葉を全力で否定したいがそんな暇はない。
声を頼りに走る。

そして走った先にいたのはフェレットっぽい動物。首には赤い宝石
のようなものがついている。体は傷つき、慢心相違だ。

「ちよつと、あんた…早すぎ…」

遅れてきたのは息切れ切れのバーニングと済ました顔の月村
俺は地面にいたフェレットっぽいのを片手でつかみ

「月村、こいつ頼むわ」

「え？……わ！！」

月村に放り投げた

「フェレット？ってすごい怪我してる！！」

「ああ、病院でも行くか」

俺達二人は急ぎ足で近くの病院へ向かった。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

バーニングは遅れて着いてきた。まあ、息は切れてるが問題はないだろう

出会い(笑)(後書き)

辛口コメントくれると嬉しいです...

魔法（笑）（前書き）

作成時間10分という短さww
まあ、半分ねただしww

でわ、どぞー！

魔法（笑）

前回のあらすじ

女っばい男高町なのは！学校ではお嬢様達と戯れてます！

帰り道、お嬢様（笑）のお達して近道したら幻聴が聞こえて来ちゃった。

声を頼りに歩くとなんか不思議なフェレットが……。怪我してるっぽかったからとりま病院へ！！

病院で見てもらったけど、怪我はたいしたことはないらしいよ！よかった！

まあ、衰弱はしてるみたいで、休養は必須だったさ！

「いんちよーせんせー。こいつって誰かのペット？ってかホントにフェレット？」

「うーん、フェレットなのかな？変わった種類みたい。それにこの首についてるのは…宝石？」

いんちよーせんせーの言つとおりフェレットには近いようで違つ。んで、宝石付けてるペットって……バーニング家の犬かよ……。

「つけてないわよ!!」

「なぜいきなり叫ぶし。耳が痛い」

ってかなぜ分かった。

いんちよーせんせーがフェレットもどきの首についている宝石に触ろうとしたらフェレットもどきはふっと目を覚ましてきよるきよるしでした。何か探してんのかなーとか思ってたらなんか目があった。まった。

「……………」

「……………」

「……………」

全員の視線が俺に…………

「よせやい！照れるだろ！」

なぜかお嬢様二人にため息を疲れた。
俺何かやった!!?」

「ってかこいつの引き取り先どうするのせんせー」

「うーん……まあ、しばらくはこの子も安静にしとかなきゃだから
こっちで預かるけど……」

まあ、目線など見る限りキラッキラしてる月村家だろうなあ……バ
ーニング家はほしがるかもだが噛み殺しそう。おもにバーニングが
ちなみにうちも無理だな。飲食店だし。

「今度で良いわよ。明日も来てくれるかしら?」

「はい!!……って!!塾の時間!!」

返事をした途端に気づいた。

現在時刻 16:36 塾開始 16:45

俺としては遅れてもいいんだけど、1分でも遅れると宿題が増える
のが困る。俺は宿題こなす派なんだ。

まあ、こっから塾まで走って7分……結構ギリギリかな。

とりま俺は全力疾走。見事6分で走りきりセーフ。次いで月村もセーフ。
バーニング？

「あんたたち、なんでそんなに早いのよ……」

9分かかって1分アウト。
せんせーに宿題追加されてた。

んで、結局授業中寝てた俺。途中当てられた問題は余裕だったし、塾行く必要があるのか？とか思いつつ確認テスト……あ、やべ。全然わからねえ。

とりあえず家で相談してみた。

親父：フェレットって何だっけ？

母親：世話するなら

兄妹：異存なし

と、飼ってもいいことになった。

メールで報告したら明日学校帰りに取りに行くことになった。

まあ、なんだかんだでねーさんが世話してくれるんじゃないかなー
とか思ってる。

さて、現在時刻21時前

正直そろそろ眠い。ということと寝ようかな？って思ってたら

グラリ

と世界が揺れた。幻聴が入ってきたときの感覚。目を閉じて集中すると本当に声が聞こえてきた。

『聞こえますか！？ボクの声が聞こえますか！？』

よくよく考えると夕べ見た夢の中の声と、昼の声は一緒だったよ。
なんといいいますか嫌な予感。

『ボクの声が聞こえるあなた！！ボクに少しだけ力をかしてください！』

念のため、返事を出してみる

『お前、あのフェレットか？』

『！！あなたは！お願いです！早く来てくださ』

プツンという音と共に消える声。次いで異常な疲労感。訳も分からずベッドへボタンキユー。あ、うとうと気持ちいい……つてところで何かが背筋を凍らせる。何かは知りません。走りに行っただってことにして、とりま病院へ向かった。

急な全力疾走と、急な停止、加えてへんな幻聴リターンズのせいか、病院に着いたら謎の頭痛。
んで、気づいたら

「ナニコレ」

灰色の世界に。

いや、どゆこと？

そしておまけに頭上から凄い破壊音

ハツとして振り向くとそっから問題のフェレットが落ちてくる。綺麗に着地するとそのまま横を走っていく。

「お、おい！待って！俺呼んだだろ！？」

残念ながら答えることはなく、そのまま木へ上っていった。端から

見たら俺変態じゃん。

はぁ、と思って帰ろうとしたら再び破壊音。

「!?!?」

木のほうへ目を向けるとそこにあったのは倒れた木と真っ黒い怪物。

「なんだよ、コレ……どういふことだよ……」

圧倒的な力。何もかもを破壊する絶対的力。親父とか兄貴とかと稽古するときと似た感じ。いや、それよりもっと上のもの。誰もが得体の知れない物体に持つ感情だ。

そう、それはつまり

「かつけえ……」

憧れだろ。

恐怖心より好奇心が多い。俺だってまだ戦隊ヒーローもの好きだからな。

ふむふむ、と感心していると一匹のフェレットがよろよろ近づいてきた。ってか忘れてたよ。君の事。

「きて、くれたの？」

「しゃべった!!?」

まあ、さっきの幻聴で知ってたけどね。

そんなことをしていると真っ黒い怪物がこっちを向いていた。アレ？
コレやばくね？

「とりあえず逃げんぞー！」

「えっ！？ちょー！！」

フェレットを抱え全力疾走。

ダダダダダ！つと町を駆け抜ける。ある程度行ったところで聞いてみた。

「アイツ何者？」

それにたいした答え

「君には資質がある」

「いや、その前にアイツ何？」

「少しだけ力を貸してください。ボクは探し者をここに……」
云々。

あ、なんだろう。会話がかみ合わない。

「まあ、なんだ。とりあえず、俺には資質が合って、それで力を貸せよ」

「そう！、そうなんです」

なんか俺には魔法を操る力があるらしい。ソレを使ってフェレットの手伝い……なるほどねえ。魔法って事は空飛んだりするあれか。実にファンシーだね。

「貸してくれますか？」

「ああ、そうだな」

「ありがとございま」だが断る「ってええええ！？」

だってこええじゃん。流れるにあれだろ？あの怪物……っていうか今空から振ってきてコンクリを自由に破壊してるコレと戦うとかそいう。無理無理。小3に何頼むか。近づいただけでつぶされるわ。

「他にあたりな」

「御礼はしますから！…！」

「なんだと」

お礼……

「どんなことでも？」

「どんなことでも」

「無茶な願いも？」

「無茶な願いも！」

俺の顔女顔 フェレットの願い出なおしてもらおう 脱女キタ！！

「あんたいい奴だな！よし、引き受けた。で、何すればいい」

「ええ！！？いいのかい！？……分かった。じゃあ心を済ませてボクに続いて！」

お、おう。それだけで良いのか

「我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て。風は空に、星は天に。そして、不屈の心はこの胸に。」

「我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て。風は空に、星は天に。そして、不屈の心はこの胸に。」

なんつつか厨二・

「この手に魔法を！レイジングハート・セットアップ！！」

「この手に魔法を！レイジングハート・セットアップ！！」

唱え終わったら宝石から声が聞こえた。

《Stend by Ready・Set UP》

瞬間俺の体を光が包む。

「なんだなんだ！！？」

「凄い魔力だ……」

いや、感心しないで。フェレット君。

光が強くなったところで頭の中で声が響いた。

《マスター。あなたの身を守る杖の形と衣服をイメージしてください》

なんかしゃべった!!?つかイメージなんて無理!!

《私はこのデバイス、レイジングハートです。よろしければ私が自動でおつくりしますが》

もういいよそれで!!

とりま心の中で叫ぶ。イメージとかすぐできないし!!そして服を剥ぎ取られ、お着替え。今人に見られたら死ぬ自身ある。だってさ

光が収まったとき、俺の服装はロングスカートっぽいズボン、それに白が基調なコート、極め付きに胸には大きな赤いリボンだったんだよ?

「なんで女っぽい服なんだよ」

《正直性別が判断できなくて………てへっ》

なんだろう。すっごくイラッと来た。

魔法（笑）（後書き）

女っぽいってのは分かってたはず。

レイハちゃんおちゃめ（笑）

なのはの服装は原作のスカートの真ん中を二股にしただけwだから
ダボダボズボンなだけですw

魔法少年（笑）（前書き）

え、封印の呪文？

ふんがー！！

アドバイス感想くれると嬉しいです！

魔法少年（笑）

前回のあらすじ

怪我したフェレットもどきを保護！

最近起きる幻聴の原因はこいつだったらしい。俺には資質があつて魔法が使えるとか使えないとか！

んで、その日の夜。へんな怪物に追われた俺は魔法を使うの覚悟！

呪文を唱えてみたら服が変わった。

んで現れた服はなぜか女物だった。

「なんで女っぽい服なんだよ」

《正直性別が判断できなくて………てへっ》

………すっげえイラつくなおい。

それにしても、このデザイン。見たことあるな………あ、学校の制服か。

「成功だ！！」

フェレットが後ろで眩いていた。成功らしい。

どうせだから聞いてみよう。

「なあフェレット。コレ何？女仕様なのはなぜ？」

そう聞いてみたらフェレットは誇らしげに言ったよ。

「それはバリアジャケット！君の身を守ってくれる衣服だ！女の子の仕様なのは……君が女の子だからだろう？」

「いや、男なんだけど」

「……………ま、まあ、レイジングハートだって調子が悪いときもあるぞ」

「今の間は何だ今の間は」

こいつ絶対俺のこと女と思ってたな。

出てきた棒で肩をトントン……これ、いつも使ってる竹刀の重さと同じだ。使いやすい。

そんなことをしているとフェレットが叫んだ

「きますー！ー！」

見るとコンクリ破壊に夢中だった奴が思いっきり飛び跳ねてこっちに突進してきた。

「おいおい追いおいおい!!これどーすんだ!!?」

「えっと、えっと、ま、まずは防御を!!」

「どうやって」

「ええ!!?ええっと…どうしょー!!」

お前がパニクるなよバカヤロー!!魔法の事知ってるのお前だけなんだぞ!!?」

仕方ない!!こっちに来ちまってるのは変わらないから……

「あいつ自体をいなす!!」

向かってくる黒い怪物を兄貴の竹刀に、杖を自分の竹刀に見立てて角度を考えながら太刀筋を入れつつ避ける!!

とか考えてたんだけどさ

《Protection》

目の前にサークル状のシールドが現れた。勝手にレイハが防いでくれたみたい。

「おお！やるなレイハ！」

《ありがとうございます》

よし！今のうちに逃げるぞ！！
フレットを掴んで

「え？ちよつと何を？」

「逃げる！！！」

猛ダツシュ。

んでついでに怪物の事を聞く

「あれは忌まわしい力の元に生み出された思念体……アレを封印するには元の姿に戻すしかないんです！攻撃や防御の魔法は心に念じるだけで発動しますが封印には呪文が必要なんです！」

「呪文ってあれか？びびでいばびでいぶー的な？」

「ソレです…！」

「……面倒なんだね。……はあ、フェレット君。俺の後ろにいなよ」

どどん厨二になっていく……

でも呪文か……呪文、呪文……あ、これでいいや

そんなことを考えていると前方から黒い怪物……思念体が登場。多分攻撃してくるだろう。でもこっちが守ってばっかじゃジリ貧だからな。こっちからも攻めていこう。

「レイハ」

《はい？》

「この杖剣みたいに見える？」

《……いえ、残念ながら形状変化で剣はありませんね……威力を高めるぐらいならできますが》

「ならそれで」

本当は竹刀みたいなら良かったんだけど……

つと、こうしているうちにも思念体は近づいている。思念体は突進じゃ無理と判断したのか触手を延ばしてきた。コレは痛そうだ！

「ふっ!!」

俺はもちろんソレを受ける気はないので、ソレを避ける。武道をやっておいて良かった。受身の態勢をとりつつ、あえて触手に突っ込む。そうすることで触手の発生源に近づいて本体を全力でたたける!!

「よっしゃあ!これでいいんだな!?フェレット!ココで封印だな!?!」

そう、聞いたんだけど

「うわああああ!!」

ん?悲鳴?

………あ、俺が避けた触手をフェレット君が食らっちゃったよ。救出救出。

「何で避けるんですか!!」

「当たったら痛いじゃん」

「ならなんで後ろにいかせたんですか!!」

「ほら、君の事をすべてから守る盾になる」的な

「おもくそ僕が的だよ!」

おっしやるとおり。今度はそうしないよう、フェレット君をポケットに入れてGO!

再び伸びてきた触手を強化した杖で2本はじき、3本の間をころころ避ける。

「ふっ!ほっ!はっ!」

「へ?わああああ!」

あ、フェレット忘れてた。まあ、生きてるからいいか。

「フェレット、ココで封印すりゃ良いんだな?」

「は、はひ……ひひれす……」

完全に目回ってるぞ。
なんかしまらねえけど

「封印するぞフェリットー！」

「はひー！ふうひんするはひまわしひふふはー！しゅへるひーとまー！
《封印するはいまわしき器ー！ジュエルシードー！》」

ふっー！ここで秘密の呪文の出番だな！

「ジュエルシード、封印！」

レイハの形状が少し変わって封印モードにー！そしてレイハからの光が思念体を包み込んだ。
思念体の頭にXXIの文字。

「ジュエルシードシリアル？？？！……封印！！」

言葉と共に飛んでいった光は思念体を包む。光が消えた先にあったのは……青い宝石。

「それがジュエルシードです。レイジンググハートで触れて」

「あ、うん」

ジュエルシードをレイハで触れる。すると宝石は吸い込まれて消えてしまった。さすが魔法。エスパー伊藤も目が点だわ。すると衣服も元に戻り、辺りに光も戻った。

「終わった……」

「あなたのおかげで……お疲れ様……あつ」

それだけ言うとフェレットは倒れてしまった。そして聞こえるのはサイレン音。

……あれ？ココ危なくね？まず小3という年齢が9時まで出歩いているのと破壊されたコンクリその他諸々。リパな犯罪者ってか不審者……

だだだ！っ！と家に向かって一目散に走った。

家を出てから30分……いまだにさっきの出来事が信じられない。女顔のただの小学生が怪物と戦うなんて……。女顔の時点でふつうじゃないけど。正直、疲れと疲れと疲れのせいでボーっとしてた。すっごく眠い。レイ八情報によると、なれない魔法運用は異常に疲れるためらしい。ユーノと会話する念話ってやつも魔法の一種で、初めて習うには上等だけど、慣れるまでは頭の負荷が半端ないって。それも一方的だったりすると受け取る側はその調節で精一杯らしいから疲れが凄いんだってさ。そのせいで眠気が凄い。ボーっとした頭で家の門をくぐるといたのはにーちゃん……

「おかえりなのは。随分長かったじゃないか」

「んー……」

「さっきサイレンなつてたが何か知らないか？」

「んー……」

「ん？その手に持つてるのはなんだ？」

「んー……」

質問に対して答える気力もなかった……。
んで、後ろからやってきたねーちゃんが手の中にいたフェレット発見。

「あらかわいー　なのは子のこのことが心配で様子を見に行ったのね？」

「んー……」

「ね、名前はなんていうの？」

「んー……」

名前……そういえば聞いてないなあ……それよりなにより眠いよ俺は。やばい。もうそろそろ限界……
そんな感じでボーっとしてると頭に声が響いた。

『ああ、忘れてました。ボクはユーノ。ユーノ＝スクライアです』

ああ、なるほどお……ユーノって言うのかあ……

『ユーノのあか……よろしくなあ。俺はなのはなー……』

『あ、はい。よろしくお願……ます、な……は。あ、ソレと一つ。
今日の事は……れぐれも……にお願いし……。あまり……
……に知れ……よー……で……』

えっ？何？後半ノイズ入ってよく聞こえなかったよ？そろそろ体が持たないらしいよ。

「ユーノ」

「ユーノ君って言うの？きっとお母さんが見たらかわいって喜ぶよ……」

そっかそっか、そりゃあ、よかつたあ……でもごめんなねーちゃん。今話してる余裕ないんだ。眠いんだ……。

「あ、そっぴやねーちゃんにーちゃん」

「「？」」「」

半分眠り眼な俺。

まあ仕方ないと思う。こんな失言をしたのは俺のせいでもないはず。

「なんかな、俺魔法少年になっただっばい」

「「は？」」「」

『は？』

3人分の声が響いたとき、俺は立ったまま寝ていた。

魔法少年（笑）（後書き）

封印の呪文の第一候補は「ふんがー」でした笑やめましたけどw
ちなみになのはくんの封印の呪文は「く封印！」ですよ。男がリリ
カルマジカルってもキモイじゃん！！

まあ、あんていの低クオリティ。

魔法ばれた(笑)(前書き)

なんだろう、この書きやすさ
適感が大好きですw

このストーリーの目標は「適当」!!!まあ、クオリティは低くな
りそうですw

んじゅ、ぶじゅー!

魔法ばれた(笑)

前回のあらすじ

へんな怪物に襲われたから変身!!! パワーアップした俺は見事怪物撃破!!!

話によるとこいつらは思念体なんだって。フェレットことユーノ君が行ってたから間違いないよ。

さて、家に帰った俺は疲れてふらふら。。。家に帰ってにーちゃんねーちゃんとはなして。。。そこで記憶が途切れてるよ。

P i P i P i P i ! !

けたたましい電子音と共に一人の少年が起きる。もぞりと布団が動き中から手が出て、音が出ていた対象、携帯電話のボタンを押す。

「ん、んんう…………ふわあああ…………あれ？俺いつの間に布団に…………」

確か、へんな怪物と戦って、何とか勝利。んでフェレットことユーノ君(?)の事情(半分も覚えてないけど)を知って…家に帰った。そしたら兄貴姉貴がいて…………あれ？何はなしたんだ？全然思い出せない…………

「って、ユーノどこ行った？」

周りにユーノはいない……もしかして、逃げた?!?それとも治ってなかった(はずの)怪我が悪化してどっかで倒れてる?!?!? やばい!とりあえずさがさないと!!

ちやつちやと着替えて会を適当にセツト!階段を降りて皆のいる元へ。

「おかーさん!!ユーノどこか知って……っであれ?」

そしたら見えてきた。

「ユーノ君、夕べは良く眠れた?」

「あ、あはは。はい。おかげさまで……」

なぜか会話してるユーノとお母さん。
どゆこと

「あ、なのは!おはよう。すごいのねえ……今でも夢みたい!」

「へ?」

「なに変な顔してるのよ!ユーノ君よ!まだ小さいのに立派だし、

魔法

だなんて物語みたいじゃない!!」

……ハイ?

なんで魔法の事知ってるんだい?誰か説明ぶりーず

「あら?昨日のこと覚えてない?夕べなのはが帰ってきた後に話してくれたじゃない!変身姿!!」

へ……そんなことあったか?

……おーけー。一回落ち着こう。席に座って、飯食って、牛乳飲んで……

……あ、思い出した。

……昨日

「なんかな、俺魔法少年になったっぽい」

「は?」

『は？』

完全に眠かった俺はこっから凄くぼやーっとしていた。

『ちょ、ちよつとなのは！！皆には秘密って言ったじゃないか！！』

「なに？なんかいったユーノ？」

「「？？」」

ユーノの念話が普通の声に聞こえていた俺は普通の声で返した。もちろん兄貴姉貴きよんとしている。そしてらユーノが言ったんだ。

「だ、か、ら！！魔法のことは皆には秘密って言って……あ」

多分、ユーノも疲れてたんだ。周りに人がいること忘れてたのかな。俺の態度に腹がたつたのか、思いっきり叫んだんだ。

「え？」

「フェレットが……しゃべった？」

完全に見られてしまったユーノ君。

「い、いえ！ボクではありません！！ボクはしゃべってません〜
〜ツツ！！」

もう完全にパニック。こっから黙ってれば良かったのに。焦って隠そうとしてしゃべった。

コレを見た姉貴大興奮

「〜〜〜ツツ！！うそ！！すごい！！すごい！！え、え、お母さんのところ行こう！！おかーさん！！」

俺と兄貴とユーノを掴んでリビングへ。それにしてもすごい勢いだっただと思う。

リビングに着いたとき、おかーさんとおとーさんは凄くびっくりしてた。

「ね…！すごい！すごいよ！の子…！」

「どうしたの美由紀？」

「あのね、この子、このフレットしゃべるの…！」

はじめはポカンとしてたお母さんたちだったけど。

「ぼくはしゃべれませんって〜!〜!」

完全にパニックに入ってテンパってるユーノが自爆。それを見てさらにびっくり。そして感動。

「ああ〜ん!! かわいい!! 凄い! 何この子!!」

「すごい……いちぢな」

「で、この子どうしたの? まさか普通のフェレットじゃないでしょ?」

なんともまあ、現実を受け入れるのが早い人たちだった。普通ならあと30分は驚いてると思う。

「なのは。この子どうしたの?」

「えっとねえー森で見つけて〜病院で〜」

「それは知ってる」

「あ、そうか」

どうも頭が回らないよ

「えっと、走りに行くってのはうそでえ、ほんとにゆーのに呼ばれたんだよお」

「呼ばれたって……病院にいるユーノ君から？」

「うん〜なんか『念話』っていう魔法なんだってさ〜」

「魔法!?!?」

「そ。で、怪物に襲われて〜、俺が倒した。こんな感じに〜」

「えっ!?!?ちよっ!?!?えっ!?!?」

「れいはー、せつとあっぷっ」

《Stend by Ready・Set UP》

そこで俺変身。

多分おかーさんがココまで焦った顔を見せるのは最初で最後だと思う。

目を丸くしているおかーさんたち。

「はい、れいはありがとー。解除して良いよ〜」

そして元の服に戻った。そこでさらに疲労感。まあ、多分魔法を使ったからだと思う。眠いは眠いけどなんとか起きてます。

そして我に帰ったユーノがさらに目が点。そして疲れたようにため息をつく。

「失礼しました。ここからはボクが説明します」

こんな感じで説明が始まった。

内容はまず自分の目的と素性。ジュエルシードを落としてしまって、反応があつた海鳴に來たつて感じかな。

んで、俺を危険にさらしてすみません〜みたいな。

「なるほど……そんな事情が……なのはのことは気にするな。なのはは簡単にやられるような弱い奴じゃない。現に帰って来ているしな」

おとーさん。少しは気にして。あの怪物普通じゃないから。

「大変だったわねえ……で、これからどうするの？」

「とりあえずは、ジュエルシードを探しに旅に出ようかと」

「ひとりで？」

「そうですね。他に頼れるところもありませんし……」

「寝るのはどうするの？」

「結界を張れるのでその中で」

ソレを聞いたおかーさん大反対！

「だめよそんなんじゃない！あぶないじゃない！もう、そうならそうと早く言えばいいのに！うちにおいて良いわよ！あなたかわいいし！」

「えっ！！？で、でも……！！！」

「いいからいいから。それと探し者探すときは、遠慮なくなのはをつれてって！本当は私達も行きたいけど、仕事があるから」

そんな感じでいろいろ決定。俺を抜きで俺の生活が話に出ている件。

まあ、そんな感じな昨日だったみたいだ。

なんともまあ……俺間抜け。終始寝ぼけてたな……最後のほう半寝状態だったし……

「あ〜……あつたねそんなこと」

「でしょ？今日、ユーノ君探し物するみたいだから帰ったら手伝ってあげてね」

「おう」

んじゃ、行って来ます。ユーノ？おかーさんと留守番……ってか多分店にいるんじゃね？あとで念話送るって言ってたからいろいろO H A N A S H I するぞ。

.....

さてさて、学校に行きましたよ。
学校ではある話題で持ちきり

「なのは！聞いた？」

「なにを」

「昨日の病院で車の事故かなんかがあったらしくて壁が壊れちゃったんだって！」

「フェレットが無事か心配で……」

あ〜……どうしょ。すっげえ身に覚えがある。と、とりあえず、昨日のことは他言無用なので……

「そのことはなあ……」

軽くぼかして真実を教える。

なんだろう。心が少し痛んだ。嘘っていけないよね。

魔法ばれた(笑)(後書き)

めちゃ微妙なところですねw

あ、そして原作ブレイク! まあ、ストーリー自体は変えない(はず
!!)

んじゃ、感想よろしくです!

初！！vsジュエルシード（笑）（前書き）

まあ、適当なのは変わらないっすww

あ、途中会話がカオスになりますけどがんばってください！

一応『』が念話」「が会話ですよ

でわでわ、どうぞ！

感想待ってます

初！！vsジュエルシード（笑）

前回のあらすじ

朝起きたら異様な疲労感……うばあ

んで下に行ったらなぜか一緒になって話すおかーさんとユーノ。何があった？って振り返ってみると結構黒歴史……まあ、魔法の事実は我が家で留めるそうです。

学校に行ったら昨日の事件の話題で持ち越し！！真実を言わないのって微妙に心が痛んだよ。

現在 4時限目

腹も減ってきて授業に集中できないわけがない。いつもなら退屈で世間では国語と呼ばれる授業。いつもならば爆睡してる俺だったが今日は違う。ユーノとお話してるんだよ。なんだかんだで聞いてなかったユーノの事情を説明してもらってる。

『ジュエルシードは、僕らの世界の古代遺産なんだ。サクツ…モグモグ…本来は手にした者の願いをかなえる魔法の石なんだけど力の発現が不安定で…サクツ…モグモグ…夕べみたいに単体で暴走して人を襲ったり、たまたまみつけた人や動物を…サクツ…モグモグ…取り込んだりすることもあるんだ』

『なんでそんな危険なものが近所に？』

『ボクのせいなんだ……調査団に依頼してた…サクツ…モグモグ…』

護送船が何かに襲われたか何らかの事故で……サクツ…モグモグ…
21個のジュエルシードがこの世界に広がってしまった…』

『あと19個………』

昨日見つけたのが1個、ユーノが持ってたので1個……コリヤ骨が折れるね。

それにしても、さっきから聞いてるとこいつジュエルシードが広げた原因が自分とか言ってるけどこいつのせいじゃないよね。事故なんだし。

『お前まじめだな』

『どっつして…』

『だってお前が広げたわけじゃないじゃん』

『でも、見つけたのは！ボクだから！…サクツ…モグモグ…ちゃん
と、元に戻さなきゃダメだから………』

なんつーかこいつかたいなあ……まじめというかなんと……
律儀？9歳って言う年齢なのに責任感じるなんて……周りの大人が
フォローするべきだろ。

そんな事考えてたらユーノが言った。

『あ、ごめん。いいたいことがあったんだ』

『なんだ？』

『えと、昨日は…サクツ…モグモグ…巻き込んだじゃって助けてもらって…サクツ…モグモグ…申し訳なかったんだけど、ボクの魔力が戻るまで、ほんのちょっと助けてもらえればいいんだ。…サクツ…モグモグ…5日、そのくらいあればいけると思う』、

俺はその言葉に力チンと来た。なんだこいつ…ふざけるなよ？

『一つ言っただいいか？』

『えと、なに？』

『……………つぶすよ？』

『ハイ！！？』

俺は精一杯のドスが聞いた声でユーノを脅す。女声でどうなるかと思っただけど…案外迫力あるな。我ながら。

『お前さ、何？ココまで巻き込んでおきながら5日で良いです？ふざけんなよ？お前このまま魔力戻ったらどうするつもりなんだ？オ
イ』

『……ジュ、ジュエルシード探しに』

『アホか！！ダメに決まってるだろ！！』

『ひう！？だ、ダメって……』

『……おまえそれで一回倒れたんだろ？ソレまた繰り返すのかよ！』

『そ、それは……』

呆れた……こいつ、真正のバカだ。また倒れたら元も子もねえじゃねえか……

『なんでも一人で解決しようとするんじゃないやねえよ！！俺らはもう巻き込まれてるんだ。俺の父さんも、母さんも、にーちゃんもねーちゃんも全部知ってるんだ！頼れよ！俺達を頼れよ！俺らはいっただって手を貸してやれる、お前を助けてやれるんだから！！』

『……なのは……ありがとう……』

びっくりした顔をしてユーノは驚いているだろう。

ったく。なんでこう、9歳の癖に一人でやろうとするかねえ……

『それにお前はうちのおかーさんはお前お気に入りなんだよ！お前

が消えると俺の悪夢が再びよみがえるじゃねえか！！それだったら喧嘩のほづがましなんだよ！！ぜってえ行かせねえ！！』

『ん？って、こっちが本音でしょ！？？』

注意、コレが本音

翠屋で起きる悲劇を繰り返したくはないんだ……俺のために死ね、ユーノ。……翠屋で何が起きたかは今度語る。今は思い出したくないよ。

まあ、おかーさんたちは喜んで助けると思っけどね。

『戦闘を喧嘩って言うなんて……はあ……でも、ありがとう。なのは』

『お』

とじろでさつきから気になった。

『ユーノ、クッキーうまいか？』

『とっつてもー!』

話してるときは愈つなよ。

現在放課後

いつものように月村とバーニングと帰路に着いている。正直二人はこっちが話さなくても延々と話し続けてくれる優れものなので、俺はユーノと念話をしていた。
でもまあ、いつか会話と念話どっちもできるようになりたいね。

『な、俺って才能的にはどうなの?』

「でね!??うちのお父さんったら今からお見合いしろって言うのよ
!?!?信じられる!?!?」

『なのはは……もう立派な魔法使いだよ』

「あはは……それは嫌だね……。あ、でもアリサちゃん、『好きな人

「がいます」って言えばそれなくなるんじゃないかな？」

『どれくらい？』

「好きな人って……誰よ？」

『少なくとも、ボクよりはずっと』

マジか！！ユーノって9歳で発掘とか負かされるほどエリートなん
だろ！？それなのに俺のほうが上がって……

「なのはちゃんがいるじゃない」

『そうなのか！？自分じゃよく分からないんだよな……』

「な、何言ってるのよ！！なのはなんて……」

『うん。魔力量とか考えれば絶対。訓練すれば絶対強くなれるよ』

「なのはちゃんとお似合いだと思うけどなあ……」

『ふーん……訓練かあ……』

「何言ってるのよ！それならすずかのほうが……それ以前に、なのはは私とは嫌でしょ！！？」

訓練……少しぐらい体に影響とか出るかな？

たとえば筋肉ついたり、背が伸びたり……もし本当なら強くなれるし男らしくもなれる……一石二鳥じゃないか。
最近ランニングじゃ行き詰ってたんだ。思わず声が出るね!!

「悪くないな」

「「えっ?」「」

「え?」

『え?』

今何が起きた?

なんか謎の情報の誤解がありまして頬に紅葉が咲いております。ええ、もう立派なもみじです
思いつきりたたきやがって……まずは念話から教えてもらおう。すつごく痛い。心も体も痛い。
さて、今家から少しだけ離れた商店街にいるんだが、歩いてたら変な感覚に襲われた。

「……ッッー！」

グラッと言っかなんと言っか。背筋が一瞬だけ凍ったんだ。紅葉が疼いたんだ。

思わず立ち止まるレベルに。

『おい、ユーノ！今のって！！？』

『うん。新しいジュエルシールドが発動している！！すぐ近くだ！！』

マジかよ……昨日の今日だぞ！？もう2つ目発見かよ！

『べっするー』

『僕もすぐ向かう！手伝ってー！』

べっすら早速喧嘩が起こりそつだ。

走りながらユーノと合流して、ポイントへ向かう。
場所はちよつとした神社だった。家から神社と商店街から神社だと商店街からのほうが遠いんだけど、まあ、追いついたのはランニングの賜物か。
発生ポイントは境内らしいよ。

「なのは！レイジングハートを！！」

「え？お、おう！」

レイハ……どこしまったっけなあ……

ヤバイヤバイ！！もう境内に着いちゃうじゃねえか！！

先に走っていたユーノは頂上に入ったときに

「現住動物を取り込んで暴走している……！！」

とかいってた。

遅れて俺も上がると……

「わああ」

モデルは犬か。目は四つあるし牙も大きくなってる。なにより大きさがおかしい。

「こいつ、どんな感じ?」

「実体がある分手ごわい!」

この間は思念体だったけど……アレより強いのか……
まあ、あいつ破壊力は凄いけど攻撃避けられたしな

「まあ、余裕だろ」

俺は言い放った。多分ドヤ顔。

「なのは!! レイジングハートの起動を!!」

「へっ?」

俺は言い放った。多分口ぽかん。

「我は使命を……から始まる奴だよ!! はやく! はやく! 来ちゃっよ
お!!」

「あんなの覚えてるわけねえだろ!？」

「ええ!! どうしよっ!!」

やっべ、怪物こっちに来た！しかも犬の分早い！
つてかユーノ落ち着け！！お前しか頼れねえんだぞ！？

「じゃ、じゃあもう一回……………」

「そんなじかんねー！！」

そんなことしてたら

「うわあああっああー！！」

「きゃあああー！！」

犬が突進してきた。

ああ、もうダメか……………そう思ってたら

《Stend by Ready! Set up!!& amp; protection》

レイハが自動で武器とシールド作ってくれた。

犬は大きく吹っ飛んだ。吹っ飛んだ犬は地面にたたきつけられ、うめいている。

「パスワードなしでレイジングハートの起動!!?」

ユーノも驚いてるらしい。って良く考えれば昨日眠り眼で何も無しで起動してんじゃない。

「い、今のうちにバリアジャケットを!!」

「バリアジャケット?あの女っぽい服か?嫌だよ」

「で、でもそのままだと攻撃食らったら……!!」

「喰らわねーから問題ねー」

女の服を着るのはこりこりなんだよ!!

さて、そんなことをしてたら犬が立ち上がって完全にこっちへロックオン。後ろ足までけっちゃって……突進する気満々ですね。

「まあ、このままじゃやられっかもな……レイ八、身体強化できるか?」

《できますが……どれくらい?》

「とりあえず全力で物を蹴っても足に支障が出ないくらい」

《了解しました》

レイ八に頼んで身体強化。俺の体をピンク色の光が。……なぜピンク。

そして待機してた犬が一気に走ってきた

「ななななのは！！はやく！はやく避けてええええ！！」

耳元で騒ぐなよ。

「避けなくても…こつすりゃ…いいだろ！」

ピンクの光を纏った俺は突進する犬を思い切り足で蹴りつけた。蹴り足の右足は犬の眉間に入り、左足は地面に軽く食い込む。だれど身体強化すげえ！痛くない！痛くないよ！！

転がってきたサッカーボールを蹴ったように犬は大きく吹っ飛んだ。そしてグルグル目を回してる。まあ、軽い脳震盪ってところかな。その間にジュエルシード封印

「ジュエルシードシリアル？？？！！………封印！！！」

光が犬を包んで締め付ける。光が消えたと思ったらジュエルシールドが落ちてきた。それをレイハで回収つと……

「どつ？俺の戦闘法。もともと剣道やら空手やらやってるからな。相手の間合いを読むのは得意なんだよ」

俺は誇らしげに言う。そしてトヤ顔。

対するユーノは

「コワイコワイコワイコワイ……」

ずっと呟いてた。まあ、やる前に言えばよかったんだけど…コレでビビッてたら21個も回収できなかつたんじゃないかねえの？俺はユーノの怖がりっぷりにため息をついた。

まあ、こんな感じで俺の魔法生活1日目は終わって行ったよ。

それにしても……さっき「きゃあああ！」って誰かが言ったけど…誰だったんだろ。

女の人なんて……いたかなあ？

初!!vsジュエルシード(笑)(後書き)

どうでした?w

魔法少年なのに魔法を使っていないこの現実。封印ぐらいか…?ww
一応、設定なんかないけど、砲撃の遠中距離タイプにはしますよ。
しろーさんのおかげで近接も強いけどw

でわ、感想待ってます

覚悟（笑） 1（前書き）

ごめんなさい眠くてかけませんw w

そして多分今日が今年最後の話かな。中途半端ごめんなさい。そして話めちやくちや笑えない。

覚悟（笑） 1

あはは、うふふ。男の顔になった俺が走る走る。

あはは、うふふ。男の顔になった俺が同姓としゃべるしゃべる。

俺が魔法少年（爆）になってから早1週間。なんとというかわりとまじめにやっていますよ。

そして今日は日曜日。誰からの誘いも受けず寝ると決めてるんだ！！
まあ、無理もないと思う。連日学校＋探索。それに『身を守る力をつけておけ！！そんなんじゃユーノを守れないぞ！！』とか言う吐くほどありがたいお言葉により行われる超ハード訓練。
体力もたねえっての。

だというのに

「なのは！！朝だよなのは！！そろそろ起きなきゃ」

クソユーノめ……折角のいい夢を……俺の念願の夢なんだぞ！！

「今日、日曜日。俺、寝てる。ちょっと寝坊させて」

「だめだよ。なのは。なのはってば!」

ああ、この光景は……

レイハをもってバリアジャケットを着て空飛び回っちゃっツインテールの女の子……顔俺かよ。へどが出るちくしょう。

ああ、くそぞう。

二度寝ってダメだな。いい夢見れない。

仕方ないのでごろんと寝返り。

「うわああ!ちょ!!!つぶれる!つぶれる!」

背中に乗ってたユーノが今俺の背中の下にいるがどうでもいい。俺は疲れてるんだよ。

ココ最近で集めたジュエルシードは5つ。
魔法?上達してないんじゃないかね?基本蹴りと殴りしかないし。カウ
ンターって凄い!

「あーダメだ。眠い」

もう、眠さが限界なんです。

それに見かねたのか、ユーノが上ってきた

「なのは、今日はジュエルシード探しはお休みにしよう。5つも集めてくれたんだし、体も休めないと」

.....

「なら起こすんじゃないよ!」

「うわあああ!」

とりあえずユーノのアホ毛を引っ張って毛布に包んでみた。まあ、しばらくは出れないんじゃないかね?

完全に目が覚めてしまった俺は着替えて階段を下りた。

台所で「ユーノ君は?」って聞かれたけど「まだねてるー!探索で疲れてるみたい!ゆっくり寝かせてあげて!」と喋っておいた。きつとこれで俺の部屋にも誰も近づかない。ユーノよ。もがき苦しめ。

わー！
わー！！

……ああ、何で俺こんなところにいるんだろう。

「高町！そっちだ！」

なぜか地元サッカーチーム……ってかうちの親主催のクラブチームに参加させられてる。折角寝てようと思ったのに……。

ププー……

あ、うちのPKじゃん。

「高町撃てよ……」

俺ですか？眠くてへろへろですよ？
他の奴がいけよ

「なのは！がんばりなさい……」

「なのはちゃんがんばってー!!」

oh...周囲の奴らの視線が厳しい。なにしてくれるバーニング月村。正直に言おう。嬉しい。嬉しいよ? だけどさ、』はずせ。はずして恥をかけ』ってオーラが敵味方両方の選手から出てるよ!!??

くそ……後に引けねえ……!!

打つしか!!

ピュー!

ホイッスル……

俺は走ってボールを蹴る。

ボールは飛んだ。

ゆっつっつっつくりと。遠藤選手並のゆっくりのシュートを。

ああ、力でねえ。

力が出なかった足は見事にボールをゆっくり飛ばした。相手キーパーは待てきれず飛び出してしまうってゴールラインを割った。そしてそこで試合終了。2-1で俺らの勝ちだった。

「ビシッと打ちなさいビシッと!」

くそつ。周囲の奴が『ざまあ』って目で見てやがる……くそつ。
バーニング許すまじ。

勝った後は翠屋で飯食ったよ。

メンバーは中で食ってるのに俺だけはじかれた。俺だけ外テラスだよ。近くにバーニング月村いるけど。めっちゃこっち見てるけど。

『女子はきんせーだ!』だってさ。俺は女子じゃねーっての。まあ、いいや。コレならゆっくり寝られる。

そんな感じでテラスで突っ伏してたら

「高町君、だよな?」

「うん?」

なんか声かけられた。逆行で顔が見えません。誰だろ？

「あ、あの！今日の試合かっこよかったです！！」

うん？

「これ、貰ってください！！」

うん？

女の子は持っていた箱をテーブルに置くとそのままどっかいつちま
った。何事？

「見ました？奥さん」

「み、見ましたわよ奥さん」

ん？なんか沸いてきた。つてかバーニングがやるとすっごく変だな。
無理してるのがばればれだよ。

「ちよつとなのは！誰よ今のは！？」

「ん？今日来てた知らない子。でもまあ、かわいかったのか？」

「そ、そうね……あたしより……その、……大きいし……」

かわいいはかわいいんだ。最後のほうが聞こえなかったよ。何が大きいって？

まあ、どうでもいいけどさ。

「何もらったの？なのはちゃん」

「わからん……開けてみるか」

中身が気になるのでちょっと拝見……ってわあお。

まさかのまた箱だよ。

「どゆこと？マトリョーシカ？」

「いや、ただの二重梱包だっただけでしょ」

それもそうか。

まあ、中身はまた今度見るかな。家でゆっくりと。でもなんだろうなあ……なんとなくこの中から嫌な感じがするんだよなあ……。

「どうしたの？なのはちゃん」

あれ、顔に出てたか？いけないいけない。

「いや、ちょっと疲れたただだよ。多分。中身は今度教えるよ。それとも二人とも時間じゃない？」

俺の言葉に二人ともハツとする。

これから二人は用事があるんだとき。月村は姉とお出かけ、バーニングは買い物。ちなみに俺の予定は昼寝。朝寝れなかった分爆睡するんだ。

「ほら、ちょうどサッカーのほうも解散だし、ここらで解散しようや。」

「そうね。じゃあそろそろお暇するわ」

「おう。じゃあ、土産よろしくバーニング」

「なんでよ！！」

「いいじゃない。勝利祝いよ、勝利祝い！」

「むう……」

冗談だけどホントに買ってきてくれるかな？
まあブルジョワに期待。

「じゃあ、またね！」

「ばいばい、なのはちゃん」

「おー」

そんな感じで二人と別れた。さあ、帰って寝るか！というときに来たのはサッカークラブキャプテン。早く寝たい、その一心の俺。なるべく早く済ませよう。

「あれ、どしたの？」

「ああ、ちょっと頼みがあってね」

ん？と思って聞いてみると

どうやら彼女（呪）に送るためのプレゼントは買ったんだけど、箱を忘れてしまったとか。それでテーブルの上によさげな箱があったから一つくれないか？ということらしい。なんと。彼女などふざけるなよ。リア充は爆発すればいい。俺なんか友達もまともにいないのに。

「あーいーよ。好きなほう持ってって」

「ほんとうかい！？ありがとう！」

そういつてキャプテンは一つの箱をつかみ取りして、ありがとう！とだけ言うのと走って行った。その後ろから付いて行ったのはきつと彼女だろう。

ちくしょう。なんかひどい目に会えばいいのに……ちょっと不謹慎か。

さて、用事も済んだことだし、帰るか。と俺も箱をつかみ取り。ポケットにねじ込みそのまま帰宅した。

帰って部屋に入ったとき

「うあー！！」

と、まだ布団に苦戦してるユーノに苦笑。
あれから何時間たった？

そしてユーノがいるのを確認してベッドにダイブ！！

「ぶぎゅー！？」

変な声が聞こえた気がするけど問題ない。おやすみ。
あ、そういえば、箱の中身見てないや……グウ

覚悟(笑) 1 (後書き)

一言

うぼあ

人物紹介

高町なのは

9歳

基本面倒くさがりやの男の子。

男なのに顔、声、髪、その他諸々をほとんど母から受け継いだのでどうみても女。

最近改善するためにトレーニング。

魔法が来てからはそこまでやってない。

魔法のタイプとしては砲撃タイプだが大体強化した拳か蹴りで何とかなってしまいうので今まで魔法という魔法を使ったことがない。

ユーノ＝スクライア

9歳

ジュエルシードを探しに来た女の子。

基本フェレット。そして自分の欲に忠実。人と話しても気に入ったお菓子は放さない。

頭、魔法、魔法センスすべていいのだがアホなのが玉に瑕。そして慌てる&何もできないほど弱い。

現在ののはの母、桃子のおもちや。
ちなみに1代めはなのはだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5852z/>

魔法少年リリカル？なのは

2011年12月30日01時51分発行